

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 155, 2011

## VIEW 展望

ウェブ | 映像 | フィジカル / 水野勝仁…2

## INFORMATION 学会組織活動報告

研究企画委員会…3 映像表現研究会…3 総務委員会…4 日本映像学会第  
38 回通常総会…4-8 支部・研究会だより 関西支部…10-11 西部支部…12  
東部支部 映画文献資料研究会…12

## REPORT 報告

台湾映画祭+シンポジウム——侯孝賢の詩学と時間のプリズム / 和田伸一郎・大  
竹瑞穂…9 関西支部第 62 回研究会 『『ザ・シンプソンズ』が映し出すアメリ  
カ社会』 / 永田あきこ…10

## FROM THE EDITORS

編集後記…12

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第 155 号」 2011 年 7 月 1 日発行  
発行人: 豊原正智 編集担当 / 総務委員会: 岡島尚志(委員長)・古賀太(副委員長)・  
岩本憲児・応雄・橋本英治・山田幸平・和田伸一郎・奥野邦利

日本映像学会事務局: 176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内  
phone: 03-5995-8287 / fax: 03-5995-8209 / e-mail: JASIAS@nihon-u.ac.jp

<http://jasias.jp/>



日本映像学会

# ウェブ | 映像 | フィジカル

水野 勝仁

「ウェブ」と「フィジカル」という2つの言葉が、これからの映像のあり方に大きく関わってくるのではないかと、私は考えています。

「ウェブ」といっても YouTube やニコニコ動画などの動画共有サイトではなく、YouTube と同じ 2005 年に発表された Google Earth をはじめとする、一見すると「映像」と考えられないウェブサービスに注目したいのです。Google Earth を「映像」と書くことに違和感を覚える人もいかもしれませんが、それは「ウェブ」上のサービスであって、「映像」ではないと。しかし、Google Earth は膨大な量の画像データをアルゴリズムによって継ぎ目なく表示するデータビジュアライゼーションであり、それは新しい種類の「映像」なのです。Google Earth をはじめとする「ウェブ」で展開する多くのサービスを「データに基づいた映像」と捉えて、映像学の考察の対象に加える必要があると、私は考えています。

Google Earth から 2 年後の 2007 年に Google は「ストリートビュー」を開始します。このサービスは、カメラを載せた車が撮影した道路沿いの 360 度の風景が地図に沿ってシームレスに表示されるものです。これを利用して作られたのが田村友一郎の《NIGHT LESS》(2010) です。《NIGHT LESS》は、ストリートビューの画面を一枚ずつスクリーンショットで保存し、それを編集して出来上がったロードムービーです。ここではストリートビューが映像作品の素材となっています。その結果見えてくるのは、ストリートビューには文字通り「夜がない」ということです。それは、ストリートビューが昼間にしか撮影できない仕組みになっているからです。世界をデータ化していく作業の制約が、そのまま映像を規定しているのです。技術的な制約からくるストリートビューの映像に「夜がない」ことが、それを「ウェブ」上のサービスとして利用しているときには問題にならないのに、「映像」として捉えたときには意味を持ってしまうことを、《NIGHT LESS》は示しています。

Google ではなく Facebook と Twitter という個人と結びついたウェブサービスを活用した作品として、川村真司、清水幹太らによるロックバンド SOUR のプロモーション・ビデオ (PV) 《映し鏡》(2010) があります。PV の内容を簡単に説明します。ブラウザで《映し鏡》のウェブページにアクセスすると、7つのウィンドウが勝手に開き、Facebook / Webcam / Twitter に接続してみることが勧められます。これらの接続が完了すると、Google のトップページがこれまた勝手に現われ、その検索窓に自分の名前が自動入力され、画像検索が行われます。そして、検索結果にある自分の顔などの複数の画像がヒトのかたちになって歩き出したと思うと、Twitter の自分のタイムラインが現われ、そこで歌詞がつぶやかれる、といったふうにブラウザがハッキングされたような感じで、PV は進行していきます。この作品のことを PV と

呼びましたが、実際は「ビデオ」ではありません。Facebook や Twitter といったソーシャルメディアが持つ個人データを用いた表現を作り出す《映し鏡》は、それらのサービスが存在している「ウェブ」という媒体でのみ可能な映像なのです。

次に「フィジカル」を取り上げたいと思います。《映し鏡》を制作した清水幹太が《iうるる》(2010) という iPad アプリを紹介しています。このアプリは、iPad に等身大の女性の顔が映し出されて、彼女の目に目薬を差してあげるというものです。iPad に備え付けられたセンサーによって、iPad を傾けると彼女は上を向きます。そこで目のあたりをタッチしてあげると、彼女に目薬がさせます。ただそれだけのことで、清水はここで iPad の画面の大きさがヒトの顔を表示するのにぴったりの大きさであることに着目します。画面サイズというフィジカルな意味で、このアプリで iPad に表示される女性はリアルな刺激を体験者に与えることになります。つまり、画面の中だけではなく、その外側のフィジカルな部分、つまり iPad というモノとの関係で、映像のリアリティが作り出されるのです。《iうるる》が示す「映像をフィジカルに感じる」という点だけでも、スマートフォンやタブレットのアプリを映像学で考察していく必要性が生じていると、私は考えます。

《iうるる》では画面の外側にフィジカルな要素がありましたが、画面の中、つまり映像そのものをフィジカルに表現した作品が真鍋大度・石橋素による《particles》(2011) です。この作品はレールの上を、LED を内蔵した多数のボールが動くことで「像」を作り出す作品です。石橋は「モニタやプロジェクターではなく『像』を描き出すシステム」に関心があると述べています。《particles》は、LED 内蔵の多数のボールというフィジカルな要素をコンピュータで制御することで「像」を結ぶことに成功しています。ここでは、画面上の「ピクセル」という「点」を精密にコントロールしてきたコンピュータが画面を飛び出して、触れることができる「モノ」を「点」として制御しています。《particles》は文字通り「フィジカルな映像」を立ち上げているのです。

映像は「ウェブ」と「フィジカル」といった要素と結びつくことで、今までとは異なる表現を作りあげています。私たちは、これらの映像表現を分析するための有効な枠組みを持っていません。それゆえに、これらの映像は、その多くが技術的な「新しさ」だけで片付けられてしまいます。しかしその「新しさ」の中には、映像と見る人との関係性や「映像」という概念そのものを問い直す契機が含まれているのです。だからこそ、映像学会で「ウェブ」や「フィジカル」と結びついた映像を積極的に取り上げて、それらを分析するための枠組み=映像学を考えていく必要があると、私は思っています。

(みずの まさのり / 東京藝術大学情報芸術センター非常勤講師)

# 研究企画委員会報告

太田 曜

〈報告と計画について〉

## 1：ハンドブックに関する現状と今後の展望

研究企画委員会がかねてより議論されて来た映像に関するハンドブックを映像学会あるいは研究企画委員会が主導して作成するという件について。

当初このハンドブックの企画は学校教育で映像の授業が行われるようになる事と関連して、教育関係者に適当な手引書、教科書的なものが無い、という事から始まった。

その後、研究企画委員会での議論を経て、3月26日の委員会で、教育関係者向けのハンドブックという発想は時機を逸している、ということとこれ以上検討しない事になった。

ただ、ここで決まったのは“教育関係者向けのハンドブック”の企画についてで、他にも出ていた映像に関するハンドブック（あるいは他の名称が適切かも知れない）の企画が排除された訳ではない。

理事会で機関誌編集委員会村山委員長からも研究企画委員会が連携しつつ映像学会ホームページを活用した会員による論文以外の例えば作家の報告や、エッセイ的なものを発表、掲載する場を作りたいとの提案がなされている。研究企画委員会としては、研究論文以外の、例えば作家の会員による報告やエッセイを発信する場をホームページなどを利用して作るのにはどうするのが良いのか、議論を進めている。

当初企画されていたハンドブックとはやや異なる展開になってはいるが、委員会で何とか方向性を見いだしたい、と考えている。

## 2：各研究会に関して。

最近の活動の状況が報告されていなかった“映像理論研究会”と“映像テキスト分析研究会”に関して、今年度以降の開催の計画が示された。

その他、映像教育研究会、映像表現研究会は既に活動については報告済み。

研究企画委員会の中では、支部所属の研究会には活動予算が付いているが、研究企画委員会所属の研究会にはそれが無いのは何故か？との議論がある。今後、委員会内で研究企画委員会所属の研究会の予算に付いて検討したい。

(おおた よう／研究企画委員長、映像作家、東京造形大学)

# 映像表現研究会報告

伊奈 新祐

北海道大学での全国大会において、「ISMIE2010」の学生作品「選抜5作品」の発表を行うことができました。諸事忙しい中、大会に間に合わせてくれた研究会事務局の奥野会員と日大のスタッフの努力に感謝する次第です。大会の作品発表の会場である教室の空き時間の枠を利用して発表上映会が行われ、伊藤会員（北海道教育大）、黒岩会員（九産大）、奥野会員（日大）、李会員（東京工芸大）らによって講評・意見交換も行われました。また懇親会の折には奥野会員によって参加各校へ「選抜作品集DVD」の配布も行われました。

以下のリストが「4票以上を獲得した選抜5作品」です。右端の<>の中の数字が獲得票数です。

〈ISMIE2010 選抜5作品〉

「THE 梅屋商店」  
(渡辺亮／10分：イメージフォーラム映像研究所) <7>

「tane 3/7」  
(宇佐美毅／3分：九州大学芸術工学部) <5>

「Chinese TV」  
(高華／6分：京都精華大学芸術学部映像コース) <5>

「瓶詰め哀歌」  
(村上直子／3分17秒：成安造形大学) <4>

「時間列車」  
(ヒサスエヒトミ／3分35秒：九州産業大学芸術学部デザイン学科) <4>

今回、はじめての取り組みとして「選抜作品集の作成」を実施しましたが、結果発表まで当初の予定よりかなり日程がずれ込み、審査用代表作品のDVDの巡回から投票結果の集計までには、予想以上に時間を要しました。今後、各校代表作の時間枠（現在、10分以内）や作品数について、また作品審査および投票のための巡回方法・視聴方法などについても、再度検討してゆきたいと思います。今年の「ISMIE2011」の準備の折にでも、参加各校の会員諸氏の意見を集約し調整したいと思います。ご協力の程、よろしくお願い致します。

昨年の京都・東京での「ISMIE2010」の上映会以後、本年5月末に「ISMIE2010 代表作品集」の上映会が、名古屋学芸大学メディア造形学部のNUAS GALLERY（2011、5/6～5/27）で開催されました。名古屋学芸大学の瀬島久美子会員と伏木啓会員によって企画運営されたことを報告致します。

(いな しんすけ／映像表現研究会代表、京都精華大学芸術学部)

# 総務委員会報告

古賀 太

一年を終えて

長い間幽霊会員だった私が、昨年の日大での総会で初めて本学会の理事となった。豊原会長、武田副会長、岡島総務委員長の新体制のもと、総務副委員長を引き受けたが、最初は何をやるのか全くわからなかった。あっという間に一年が過ぎて、先日の北大の総会の壇上で決算の説明をしながら、この一年を振り返ってみた。

新体制の一年で確実に進んだことが3つある。1つはこの文章が載っている、改訂版ウェブサイトの制作だ。これは前年から開かれていた小委員会を引き継いだもので、4社の見積もりを比較検討した結果1社を選定し、昨年8月に制作を依頼して、11月から稼働し始めた。研究会のお知らせや理事会の議事録などに加えて、今年の1月1日付けから、年4回の日会報のうち3回がウェブ上で公開となった。会報は一回の印刷費が約25万円かかっていたが、輸送費も考えると大きな予算削減となる。今年度はその分、研究関係費が増えた。学会誌国際版ICONICSのウェブ化も編集委員会で検討中だ。

もう1つは、会費の銀行口座自動引き落としの推進である。理事会で自動引き落としを標準とすることが決議され、今年の1月1日にお願いを出したところ、新規に50人ほどの引き落とし会員が増えた。現在のところ全会員の半分に少し満たない約360人がこの手続きを済ませているが、会費の早期徴収による安定的な学会運営のために、是非とも全会員に引き落としをお願いしたい。

3つ目に、現在取り組んでいるのが、理事の若返りだ。最近の選挙では、理事に当選した後に高齢や健康を理由に辞退する会員が多く、いわゆる「死に票」となっていた。かつて理事の固定化を打破するために任期を連続3回までとすることが決められたが、今回はさらなる方策が検討中である。数度の理事会での慎重な検討のうに承認されたのが、70歳以上の会員に選挙前に辞退を申し出る権利を与えることだ。さらに一定以上の回数の理事経験者に同等の権利を与えることも、現在小委員会で検討中である。これによって、現在大半が50歳以上の理事会の大幅な若返りが期待される。

会費を早く確実に徴収し、予算をできるだけ有効に使い、事務局の安定的運営を支えながら、幅広い会員の希望を反映させる理事会を作ってゆく。総務委員会はそうした活動を推進するところだというのが、ようやくわかってきた。

(こが ふとし/総務副委員長、日本大学芸術学部)

# 日本映像学会第38回 通常総会報告

事務局

去る5月28日(土)17時00分より、北海道大学学術交流会館講堂に於いて第38回通常総会が開催されました。

総会は出席者数82名、委任状200通で会則第19条「正会員(840名)である構成の3分の1以上の出席(委任状を含む)」をもって、定足数を満たしており総会は成立。豊原正智会長が挨拶され議長となつて、以下の議事がすすめられました。

## (I) 報告承認に関する件

(別掲「2010年度会務及び研究事業報告」、「2010年度収支計算書」、「正味財産増減計算書」、「貸借対照表」参照)

(イ) 2010年度事業報告が橋本英治常任理事、村山匡一郎常任理事よりあり、承認。

(ロ) 支部活動報告が田島良一常任理事よりあり、承認。

(ハ) 2010年度収支計算報告が古賀太常任理事よりあり、承認。

(ニ) 2010年度監査報告が山口良臣監事よりあり、承認。

## (II) 審議に関する件

(別掲「2011年度会務及び研究事業計画」「2011年度予算書」参照)

(イ) 2011年度事業計画案が山田幸平理事、太田曜常任理事より提案、提案通り可決。

(ロ) 支部活動計画が大橋勝常任理事より提案、提案通り可決。

(ハ) 2011年度予算案が武田潔副会長より提案、提案通り可決。

## (III) その他

(イ) 正会員会費自動口座振替の推進が呼びかけられた。

(ロ) 来年度第38回大会について九州大学を主催校に行われることが発表された。

(ハ) 次期役員選挙に関し内規の一部改定が行われることが発表された。

以上 (I) (II) (III) すべて審議と承認がなされ、会長の閉会挨拶をもって17時50分、閉会されました。

以上。





## 2010年度会務及び研究事業報告

自 2010年4月1日～ 至 2011年3月31日

I. 一般会議	
(1) 総 会 .....	1回
(2) 理 事 会 .....	7回
(3) 研究企画委員会 .....	4回
(4) 機関誌編集委員会 .....	6回
(5) 総務委員会 .....	3回
(6) 会計監査 .....	2回
(7) 選挙管理委員会 .....	1回
II. 研究・事業等の活動	
(1) 年次大会 (第36回) .....	1回
(2) 機関誌『映像学』の刊行 .....	2回
(3) 会報の刊行 .....	4回
(4) 会員名簿の刊行 .....	1回
(5) 研究会	
(映像理論) .....	0回
(映像教育) .....	4回
(映像表現) .....	3回
(映像テキスト分析) .....	1回
III. 支部活動	
(イ) 東部支部	
(1) 支部総会 .....	1回
(2) 幹 事 会 .....	3回
(3) 講 演 会 .....	1回
(4) 支部研究会	
(デジタルメディア) .....	2回
(映画文献資料) .....	2回
(アニメーション) .....	1回
(映像心理学) .....	1回
(クロスメディア) .....	1回
(ロ) 関西支部	
(1) 支部総会 .....	1回
(2) 幹 事 会 .....	3回
(3) 支部研究会 .....	3回
(4) セミナー .....	1回
(ハ) 中部支部	
(1) 支部総会 .....	1回
(2) 幹 事 会 .....	3回
(3) 支部研究会 .....	3回
(4) 学生作品上映会 .....	1回
(5) その他 (学際交流視察研究会, ほか) .....	3回
(ニ) 西部支部	
(1) 支部総会 .....	1回
(2) 研究例会 .....	2回
(3) 幹事会 .....	3回
(4) 講演会 .....	1回
(5) 上映会 .....	2回

## 2011年度会務及び研究事業計画

自 2011年4月1日～ 至 2012年3月31日

I. 一般会議	
(1) 総 会 .....	1回
(2) 理 事 会 .....	6回
(3) 研究企画委員会 .....	4回
(4) 機関誌編集委員会 .....	5回
(5) 総務委員会 .....	3回
(6) 会計監査 .....	2回
II. 研究・事業等の活動	
(1) 年次大会 (第37回) .....	1回
(2) 機関誌『映像学』の刊行 .....	2回
(3) 会報の刊行 .....	4回
(4) 研究会	
(映像理論) .....	2回
(映像教育) .....	2回
(映像表現) .....	3回
(映像テキスト分析) .....	1回
III. 支部活動	
(イ) 東部支部	
(1) 支部総会 .....	1回
(2) 幹 事 会 .....	3回
(3) 講 演 会 .....	1回
(4) 支部研究会	
(デジタルメディア) .....	2回
(映画文献資料) .....	2回
(アニメーション) .....	2回
(映像心理学) .....	2回
(クロスメディア) .....	3回
(ロ) 関西支部	
(1) 支部総会 .....	1回
(2) 幹 事 会 .....	3回
(3) 支部研究会 .....	3回
(4) セミナー .....	1回
(ハ) 中部支部	
(1) 支部総会 .....	1回
(2) 幹 事 会 .....	3回
(3) 支部研究会 .....	3回
(4) 学生作品上映会 .....	1回
(5) その他 (学際交流視察研究会, ほか) .....	2回
(ニ) 西部支部	
(1) 支部総会 .....	1回
(2) 研究例会 .....	2回
(3) 幹事会 .....	3回
(4) 講演会 .....	1回
(5) 上映会 .....	2回

※会員数 (2011年4月1日現在)

正会員 837	賛助会員 16	合計 853
---------	---------	--------

# 台湾映画祭＋シンポジウム —— 侯孝賢の詩学と時間のプリズム

和田伸一郎・大竹瑞穂

『侯孝賢の詩学と時間のプリズム』と題し、6月25日(土)、26日(日)の二日間に渡って愛知芸術文化センターと名古屋大学で台湾映画祭とシンポジウムが開催された。

初日は愛知芸術文化センターにて『悲情城市』(1989年)と『百年恋歌』(2005年)が上映された後に、侯孝賢監督と脚本家朱天文氏を囲む座談会が行われた(登壇者は他に、葉月瑜氏、盧非易氏、池側隆之氏、司会は藤本秀朗氏)。定員180名の会場は満席で立ち見が出るほどだった。二日目は場所を名古屋大学に移し、「国際シンポジウム」として国内外の研究者を招き、講演、研究発表、ラウンドテーブル・ディスカッションが行われた。

初日に行われた座談会で印象に残ったことを記してみたい。上映された『悲情城市』(1989年)では、日清戦争以降、日本の植民地下にあった台湾が、1945年の日本の敗戦からほどなくして国民党の支配下に置かれた際に生じた様々な混乱や、国民党による圧政がもたらしたものの(「二・二八事件」、50年代の白色テロ)が描かれている。こうした政治的に重いテーマを描くことができた理由として、1949年以来台湾全土に敷かれていた戒厳令が1987年に解除されたこと(1988年に蒋介石の息子、蒋経国が死去)を監督自身は挙げていたが、そうした生々しいタブーを戒厳解除直後に映画化したことについて、制作中だけでなく制作後も多くの議論がなされ、いまもなおなされているという。その一方、監督が政治的な話しを多くは語ろうとしなかったところに、国にとってのタブーを歴史化することの責任の重大さを垣間見たように思え、印象的だった。しかし監督自身も述べていたように、この作品がヴェネツィア国際映画祭で金獅子賞を受賞したことが大きな収穫となり、台湾映画を国外に認知させることにもつながった(黒澤明の『羅生門』のようなものになった)。

また、脚本家の朱氏からは、ミケランジェロが石のかたまりにダビデ像を見て、それが現れ出す仲介人(創造者ではなく)となったように、出演者がその場に生き生きと存在感を持って来るまで待つところに、監督の映画作りの要諦があるというお話があり、印象的だった。

(和田伸一郎/わだしんいちろう/中部大学)

翌日の名古屋大学でのシンポジウムでは、藤井省三氏による『百年恋歌』の中の台湾百年史と張小虹氏による「パリの長鏡頭(ロングテイク)―侯孝賢と『レッド・バルーン』」の二つの基調講演に続き、三つの研究発表(陳儒修氏「二十年後の『悲情城市』再考―音声、映像、時間、空間、ジェームズ・アデン氏「侯孝賢の『悲情城市』一国の内と外の文化大使」、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ氏「侯孝賢の歴史との対話―『珈琲時光』」)が行われ、それぞれに藤本秀朗氏、ダレル・ウィリアム・ディヴィス氏、廖炳惠氏がコメントし発表者がこれに回答した。

いずれの研究も大変興味深いものであったが、ここでは私が印象に残った点の一つだけ述べたい。それは、2000年代以降の作品を論じる視点の多様さである。藤井氏が『百年恋歌』での「現在」(2005年)の表象に、中国からの独立か併合かを決めたい近年の台湾のナショナル・アイデンティティの曖昧さを読み込むのに対し、張氏は『レッド・バルーン』での「ロングテイク」は、パリと台湾を二項対立や文化交流としてではなく、「コード変換」し「流動的」な「多層構造の動態」として描いているとし、それをグローバル化に応じた「政治」的選択と「詩学」の実践だと主張する。ワダ・マルシアーノ氏は、『珈琲時光』に「地図」「音」「映画史」の記憶を見出し、それが日本の観客の日常経験における「共通感覚」に訴える点で「日本映画」足らしていると論じる。従来の研究は、台湾ニューシネマの作品や「歴史三部作」を取り上げ、それらの政治性に焦点を当てることが多かった。とりわけ『悲情城市』については、「二・二八事件」の表現をめぐる様々な議論が展開されつつも、国民党権威対民衆という対立を軸にその政治的な意味を浮かび上がらせる試みが盛んに行われた。しかし、近年の侯作品に対しては、グローバル化に伴い映画産業のあり方が変化し、監督自身も日本やフランスでの映画制作を経験する中で、監督が如何にグローバル化という事態と対峙しているか、その一筋縄では行かない交渉のありかたをも浮かび上がらせている方向に研究者の関心がシフトしていると感じる。この

点、グローバル化と文化的差異をどのように論じるかということについても、いずれの研究からも多くの興味深い示唆を得ることが出来た。

発表後には、各パネリストとコメンテーター、侯孝賢監督と朱天文氏が円座になって討論が行われた。印象的だったのは、会場内から次の質問が出た時である。例えば『悲情城市』ではトニー・レオンが台湾語を話せないという理由で聾啞者の役を設定したと監督が説明したように、表象上重要な意味を持つと研究者が論じたことが監督の言うことと食い違う場合どうすれば良いのか。これに対し侯監督は、各研究者からの回答を受けた後で、映画を作る時は直観で作るが、研究者が例えそれとは異なる見解を示したとしても、その研究行為もまた映画制作と同様に創造行為である点で問題はないという見方に賛成だと答えた。侯監督の答えには、監督自身の創造者としての自負を感じると同時に、同じく映画研究を志す者として、とても勇気付けられる思いがした。このように、映画製作者と研究者が一堂に会し、議論が活発に行われたことに、この国際シンポジウムの意義があると感じた。

(大竹瑞穂/おおたけ みずほ/名古屋大学大学院博士課程)



関西支部第 62 回研究会〔2011 年 3 月 12 日・  
神戸芸術工科大学 8 号棟 8216 教室〕

# 『ザ・シンプソンズ』が 映し出すアメリカ社会

永田 あきこ

アニメーション『ザ・シンプソンズ』において、シンプソン一家の日常生活を通して描かれるアメリカ社会の抱える問題は、夫婦の愛情、親子の愛情、近隣社会の問題、心の問題、国家権力の問題、環境問題、新しい家族の問題など、取り上げている範囲は実に広い。『ザ・シンプソンズ』という作品がなぜ 22 年間という長期間放送されているのかを考えると同時に、この作品に描かれる家族像について焦点を当て、そこから見えてくる現代アメリカ社会における個人主義の抱える問題を取り上げた。

現代のアメリカは、個人主義がゆくゆくはアメリカ人を互いに孤立させることになるという Democracy in America の著者であるトクヴィルの予想どおりの社会となってしまう、孤立した個人はセラピーへ行くことでものごとを解決しようとするようになった。このようにアメリカにおける共同体のあるべき姿が見失われている現状は、『ザ・シンプソンズ』における中心的な登場人物の一人である父親のホームーが理想の家族愛を求めて、家族セラピーへ出かけるエピソードにも映し出されている。このエピソードは、理想の家族像が変化し、従来の価値観が揺らぎ理想とすべき確かなものがつかめず不安になったアメリカ人の姿や、人々が習慣的にセラピーへ通うことになってしまったアメリカ社会を風刺しており、家族が個人と社会を繋ぐ役割を果たすことはなく、人々が孤立するようになった社会に警鐘を鳴らしている。

現代のアメリカ人は様々な家族形態を受け入れつつも、多くの人々は過去のアメリカの家族形態を理想の家族像として潜在的に考えているのではない。このような時代に『ザ・シンプソンズ』というアニメーションは、現代のアメリカ人が心の底で無意識に考えている理想の家族像をシンプソン一家に重ね合わせ、同時に個人の選択の自由であるとされる様々な形態の家族像をシンプソン一家以外の人々に重ね合わせて描き出している。このように、『ザ・シンプソンズ』が現代のアメリカ社会の現状を風刺的に映し出していることがアメリカで共感を呼び、人々に受け入れられ、長期間放映されていると考えられる。

(ながた あきこ／関西学院大学大学院社会学研究科博士課程前期課程)

## 支部・研究会だより 関西支部

大橋 勝

〈報告と計画について〉

関西支部では、花園大学創造表現学科の福原正行会員のお世話により、以下の要領で関西支部幹事会、第 63 回研究会を開催しました。

日程：平成 23 年 5 月 14 日（土）

会場：花園大学 拈花館（ねんげかん）

研究発表

「バレエの映像化について、たとえば 'KENNETH MACMILAN'S ROMEO AND JULIET' の場合」 大阪大学大学院文学研究科 博士前期課程 永井麻里子

「時代劇映画の現代的転換としての「残酷時代劇」の再検討」 花園大学文学部 大澤浄

永井会員の発表は、映像化されたバレエ作品『ロミオとジュリエット』（英国ロイヤル・バレエ、ケネス・マクミラン振付、1987 年コヴェント・ガーデン・ロイヤル・オペラ・ハウス）を題材に、ダンス・クラシックの型とコンテキストを詳細に分析することで、バレエを映像化することの意味を検証しています。同作品の主要登場人物パリス、ジュリエット、ロミオの各場面における振付を特にアラベスク、回転、リフトに限定して比較し、背景となる物語との関連で、それぞれの身振りがどのような意味や感情を表しているのかが明快に示されました。ここでは繰り返し視聴による比較検討を可能とする映像メディアの特長が発揮されています。質疑応答では、作品のレベルにおいてバレエを映像化することの意義についての議論が展開し、今後の更なる研究が待たれることとなりました。

大澤会員の発表では、「残酷時代劇」をジャーナリズムと批評の言説からの捉え直しと、テキストの検討と映画史的位置づけをはかるもので、具体的資料に基づいた客観的分析と深い洞察による考察が行われました。戦後出版物における「残酷」の語の登場頻度の調査と、語そのものへの批判的言説。残酷時代劇の展開と映画における残酷描写についての考察。これらの検証を経て、発表者は「残酷時代劇」（とされる）映画における「残酷」のありようを暫定的に 3 つのタイプに分類しています。すなわち(向)剣豪スペクタクルとしての残酷、(向)発発=抵抗としての残酷、(向)罪としての残酷です。そして「残酷時代劇」が表出した複数の関心は、様々な形を変えてその後の映画、TV ドラマ（例えば任侠映画など）に引き継がれていることが指摘されました。質疑応答では活発に発言が行われ、有意義な議論な議論を共有することができたと思われまます。

今後の活動計画としては、平成 23 年 12 月に第 64 回研究会と平成 23 年度総会を、平成 24 年 3 月に第 65 回研究会を開催する予定です。当番校、研究テーマ、発表者等詳細は決まり次第お知らせいたします。

また恒例となりました第 33 回夏期映画ゼミナールを 7 月 29 日(金)、30 日(土)、31 日(日)に京都・関西セミナーハウスで開催します。今回は「愛と恋 さまざまなかたち」という表題で選出された映画 9 本の上映と、30 日には山田幸平会員の司会で、大津一郎氏（脚本家）、原田徹氏（映画監督）、石塚洋史会員（映画研究者）をスピーカーにシンポジウムを行います。プログラムの詳細及び参加申し込みは別紙（次ページ）をご参照下さい。関心のある方は是非参加をご検討下さい。

(おおはしまさる／大阪芸術大学)



日本映像学会関西支部第33回夏期映画ゼミナール 2011年

愛と恋 さまざまなかたち

主催：日本映像学会関西支部・京都府・京都府京都文化博物館 共催：(財)京都ゼミナールハウス

7月29日(金)		昼食(午後0:00~午後1:30)			
午後1:40~		開会の辞			
午後1:45~午後3:30		『浪花の恋の物語』(内田吐夢)	1959年	105分	東映(京都)
午後3:50~午後5:25		『赤い天使』(増村保造)	1966年	95分	大映(東京)
		夕食(午後5:30~午後7:00)			
午後7:15~午後8:37		『十代の妊娠』(帯盛迪彦)	1970年	82分	大映(京都)
7月30日(土)		朝食(午前8:00~午前9:00)			
午前9:00~午前10:49		『薄桜記』(森一生)	1959年	109分	大映(京都)
午前11:05~午後0:41		『青春残酷物語』(大島渚)	1960年	96分	松竹(大船)
		昼食(午後0:00~午後1:30)			
午後1:30~午後3:30		『墨東綺譚』(豊田四郎)	1960年	120分	東京映画
午後3:50~午後5:51		『サンダカン八番娼館 望郷』(熊井啓)	1974年	121分	東宝=俳優座映画放送
		夕食(午後5:30~午後7:00)			
午後7:00~午後9:30		シンポジウム			
大津一瑠(脚本家、大阪芸術大学客員教授) / 原田徹(映画監督、大阪芸術大学客員教授) 石塚洋史(帝塚山学院大学非常勤講師) / 司会進行：山田幸平(大阪芸術大学名誉教授)					
7月31日(日)		朝食(午前8:00~午前9:00)			
午前9:00~午前10:51		『暁の脱走』(谷口千吉)	1950年	111分	新東宝
午前11:05~午後0:31		『狂った果実』(中平康)	1956年	86分	日活
		閉会の辞			
		昼食(午後0:00~午後1:30)			

会場：京都市右京区京北下中町鳥谷2番地 京都府立ゼミナールハウス TEL0771(54)0216

7月29日は無料送迎車があります。 JR 京都駅近く、新・都ホテル午前11:00発 ゼミナールハウス午後0:20頃着  
 ※ JR バスご利用の場合(有料)「周山行」(周山にて乗換) 京都駅前午前11:00発 ゼミナールハウス午後0:48着  
 京都駅前午後2:00発 京北病院前午後3:44着(ゼミナールハウスまで徒歩5分)

参加費：二泊食事付 学会会員、一般 15,000円  
 学生 12,000円  
 懇親会：「山国笑福亭」(鮎料理) TEL0771(53)0016 会費15,000円(学生8,000円)  
 申込締切：7月20日(水)  
 参加申込先：〒585-8555 大阪府南河内郡河南町東山469  
 大阪芸術大学映像学科内 日本映像学会関西支部事務局(遠藤)宛  
 TEL 0721(93)3781 内線:3327 FAX 0721(93)6396

日本映像学会関西支部 第33回夏期映画ゼミナール 2011 参加申込書			
ふりがな		性別 <input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	
氏名		(部屋割りのため必要)	
住所	(〒 — )		
	(TEL — — )		
所属		(学生の場合は学科と学年も記入して下さい)	
<input type="checkbox"/> 会員	¥15,000	<input type="checkbox"/> 一般	¥15,000
<input type="checkbox"/> 懇親会	¥15,000 (学生 ¥8,000)	<input type="checkbox"/> 学生	¥12,000
		<input type="checkbox"/> 参加	<input type="checkbox"/> 不参加

領収書
平成23年 月 日
様
金 円也
但し、日本映像学会関西支部第33回夏期映画ゼミナール参加費
〒585-8555 大阪府南河内郡河南町東山469
大阪芸術大学映像学科内
<b>日本映像学会関西支部事務局</b> 印
TEL 0721(93)3781 (内線:3327)



## 西部支部

中村 滋延

## &lt;活動報告&gt;

西部支部協賛事業として、イメージ・フォーラム・フェスティバル  
2011「福岡特別講演」を開催した。

タイトル：伊奈新祐 特別講演会

「日本を代表する映像作家が語る、映像の過去・現在・未来—

ビデオアートからメディアアートへ」(聴き手：黒岩俊哉)

日時：2011年6月4日(土) 17:00-19:00

場所：福岡市総合図書館 映像ホール・シネラ

上映作品：

『流・FLOW (2)』

『SHA』

『風騷 .FUSO (2)』

『Sketch of Kyo(京) vol.2』

『女拓 (Nyotaku)』

『Crane Performance』

(いずれも伊奈新祐作品)

かつて福岡で映像制作を開始した伊奈新祐のビデオアート代表作を、福岡の映像関係者がまとめて見ることの出来た貴重な機会であった。その講演は彼の創造思考の一端を開陳したもので、知的刺激を聴衆に与えてくれた。ビデオアートをメディアアートと主張する伊奈の、モノを見る目と、映像テクノロジーへの関わり方に、作家としての前向きなこだわりを感じた。

## &lt;計画&gt;

西部支部研究発表会を今年12月までに開催する(日時場所は現在検討中)。

以上です。

(なかむら しのぶ/西部支部担当常任理事、九州大学大学院教授、  
作曲家、メディアアーティスト)

## 編集後記

総務委員会

■暑さ厳しきおりではございますが、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。冒頭の「展望」で水野会員が、若い感性をもった人だからこそ書ける文章を投稿してくれましたが、現在この種のテーマをあつかう雑誌がほとんど見あたらない状況の中で、日本映像学会こそこうした才能が集まる場になって欲しいと改めて感じました。研究企画委員長の太田先生が「報告」の中で書かれておられるような、学会HPへの寄稿などという形もその一つ的手段になりうるのではないのでしょうか。■今回原稿を執筆していただいたすべての先生がたに感謝申し上げますとともに、とくに「展望」を快諾してくれた水野さん、急な申し出にお応えいただいた、総務副委員長の古賀先生、名古屋大学の藤木先生、名古屋大学博士課程の大竹さん、査読を引き受けて下さった総務委員の橋本先生には、心よりお礼を申し上げたいと思います。■次回の会報は大会特集号となっております。ご期待下さい。(和田伸一郎)

## 第28回映画文献資料研究会のお知らせ

日本映像学会映画文献資料研究会では下記日程で研究例会を開催します。ふるってご参加下さい。

記

発表者：牧 由尚氏(日本映画史研究家)

テーマ：「銀幕の姐御 伏見直江の生涯と日本無声映画の時代」

伊藤大輔監督の『新版大岡政談』の櫛巻お藤等で有名な姐御女優伏見直江の研究をライフ・ワークとする牧由尚氏が、長年にわたる研究成果を氏の秘蔵する貴重な映像の上映を交えて発表します。

日時：7月23日(土) 午後3時～5時

場所：日本大学芸術学部東棟2階E204教室

西武池袋線江古田駅下車徒歩5分

※ 問合せ先 TEL 03-5995-8944・8220

田島良一

日本映像学会映画文献資料研究会

代表 田島良一

〒176-8525 東京都練馬区旭丘2-42-1

日本大学芸術学部映画学科内

TEL:03-5995-8944

以上